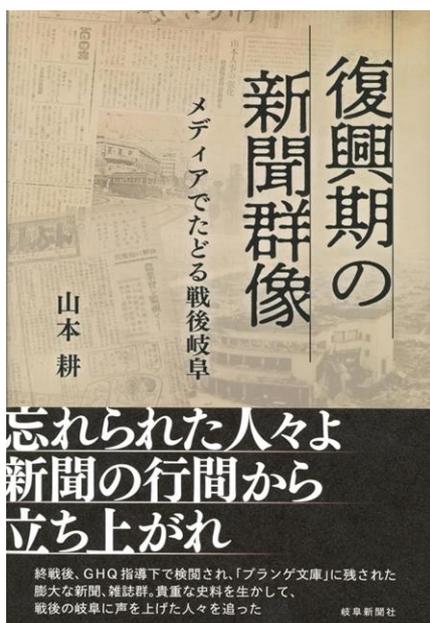


プランゲ文庫所蔵資料などでたどる戦後岐阜

2024.7.6 諜報研究会用レジュメ

岐阜放送代表取締役社長 山本耕

この5月下旬、岐阜県の地方紙「岐阜新聞」に約2年半連載した企画「復興期の新聞群像 メディアでたどる戦後岐阜」を、加筆再構成し同名の書籍として出版した。連載の過程で、プランゲ文庫収蔵雑誌の目次をデータベース化された山本武利先生、土屋礼子先生に同文庫活用の現状などについて話をうかがい、本文中で紹介した。今回、山本先生からこの研究会でお話をする機会をいただいた。



<自己紹介>

山本 耕 (やまもと こう)

昭和30(1955)年、岐阜市生まれ。

早稲田大学教育学部卒。岐阜新聞広告局長、編集局長、論説委員長などを経て岐阜放送代表取締役社長。新聞、雑誌などメディア史や、カストリ雑誌、遊郭、花柳界、盛り場などの歴史探求を進める。著書に「岐阜新聞連載コラム 口笛と分水嶺」(岐阜新聞社、2015年)、「光秀の歩き方」(同、2019年)。

1. プランゲ文庫

米メリーランド大学「ゴードン・W・プランゲ文庫」には新聞1万8047タイトル、雑誌1万3799タイトルが含まれる。国立国会図書館所収の同文庫のリストを、書誌情報に「岐阜」を含むもので検索すると、251タイトルがヒットする。そのうち新聞が147、雑誌は85。他に図書13、文書・図像類（検閲ゲラ）6となっている。新聞、雑誌には途中で改題したものなど若干の重複が見られる。さらに書誌情報に「岐阜」を含まず、「大垣」「多治見」などの地名で初めてヒットするものも若干みられ、正確な数ははっきりしない。

それら新聞、雑誌のうち、岐阜県図書館などで現存が確認できるのはごく一部に過ぎない。プランゲ文庫がなければ、大半が地上から消えていただろう。同文庫は、まさに占領期の岐阜を保存したタイムカプセルと言える。

2. 岐阜県の新開状況

まず岐阜県内の明治以来の新開発行状況に触れておきたい。

「岐阜日日新聞」 明治14（1881）年創刊 改進黨系

「濃飛日報」 明治21（1888）年創刊 自由党系

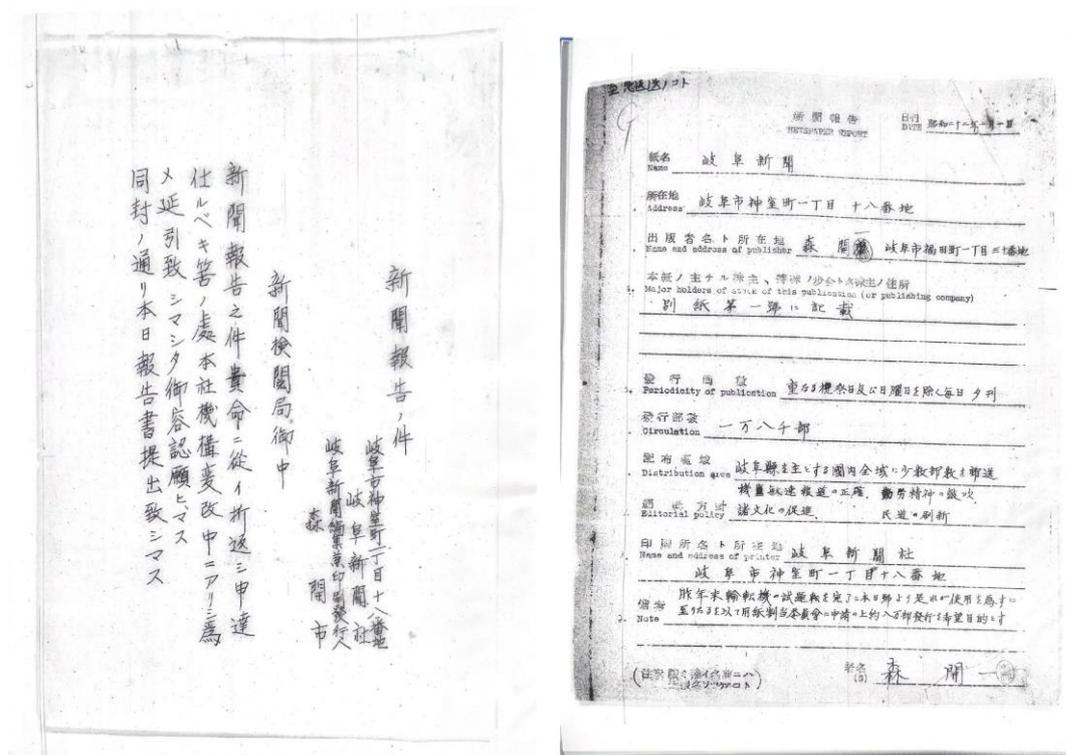
比較的穩健な岐阜日日と、濃飛自由党の機關紙的スタンスで発禁回数日本一を誇る濃飛の、2紙の競合時代が長く続いた。両紙は“犬猿の仲、と言われ、紙面での非難合戦や訴訟沙汰になったこともあった。

大正末期、経営不振に陥っていた濃飛は、国政を目指す名古屋市議清寛に買われて夕刊単独紙「岐阜新聞」となる。岐阜に鞍替えした清は、政友会に属していたが、憲政会に転じ、衆院岐阜1区で初当選し連続4期務めた。再びじり

貧となった岐阜新聞は、昭和15（1940）年には新興実業家古川鉄男に買われ、戦時下の新聞合同で1県1紙の「岐阜合同新聞」となる。

戦後、旧岐阜日日の社屋、輪転機を使い紙齢も継承した「岐阜タイムス」が「岐阜合同新聞」から題字を変えて再出発する。「岐阜日日新聞」さらに「岐阜新聞」と題字を変えて現在に至っている。

濃飛日報の流れを汲む岐阜新聞は、古川らによって戦後復刊されたようだが、新聞用紙をヤミに横流ししていたことが発覚。用紙割当を止められ発行できなくなった。プランゲ文庫には、岐阜新聞から新聞検閲局あての提出文書のみが残されており、紙面は現存が確認できない。



3. 中央と地方

戦後に岐阜県内で創刊された新聞には、政党、公共機関、学校関係、宗教、労働組合、各種団体などの機関紙的なものも少なくないが、売価を付けて商業

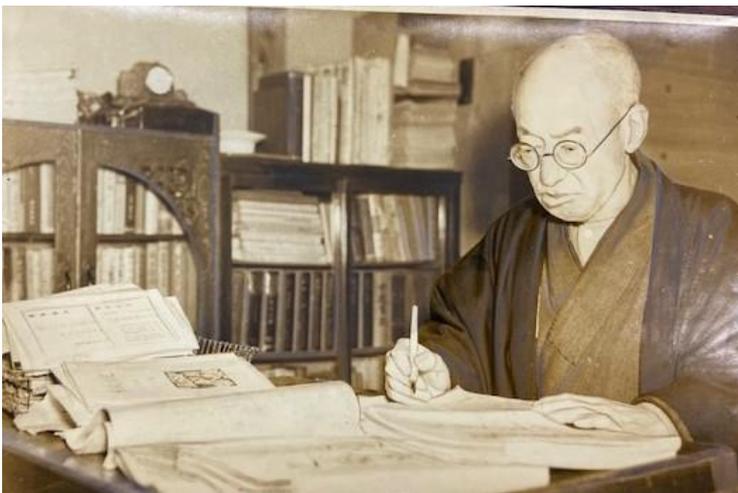
紙として出されたものがかなりの数を占める。そのうち全国紙や地方紙は数紙に過ぎず、大半は新たに立ち上げられた新聞群だ。

ここで強調しておきたいのは、同文庫所蔵の新聞、雑誌には東京など中央発行のものに比べて、地方発行のものが圧倒的に多いということだ。

それらの新興新聞が生まれた背景には、戦時中に大本営発表をそのまま報じた全国紙や地方紙ではなく、読者が新しい新聞を求めた側面があったのではないか。特に全国紙への不信感といった感情が底流にあったと想像される。

岐阜はかねてより保守王国と呼ばれ、現在、衆院5人、参院2人すべてを自民党議員が占めている（1人は政治資金問題で離党）。だが戦後の中選挙区選挙では、自民党、社会党が拮抗していた時代もあった。昭和55年総選挙では旧岐阜1区で共産党女性代議士が誕生している。革新的、進歩的勢力が一定の支持層を持っていた。

そして岐阜には、国民文化に対して地方文化は決して下にあるものではない、と捉える土壌があった。一人の人物を紹介したい。



“逆境の文人、”と呼ばれた小木曾旭晃は、昭和初期から第二次世界大戦中にかけて、長く岐阜日日新聞（現岐阜新聞）の編集局長を務めた。戦時下の「岐阜合同新聞」を含めて、在職期間は約15年に及んだ。少年時に聴力を失い、会

話はすべて筆談で行った。多くの人に敬愛され、親しみを込めて「キョッコウ（旭晃）さん」と呼ばれた。

明治15（1882）年生まれ。本名は周二。12歳のとき校庭での事故で聴力を失い、小学校高等科を中退。将来を悲観し苦悩したが、独学で文筆の道を志し、雑誌や新聞の記者として身を立てた。文芸誌「山鳩」や青少年対象の「教育新聞」を、全国の同人、読者に向けて発行。地方文化の育成発展に努め、「岐阜に旭晃あり」と全国に知られた。大正9（1920）年に岐阜日日新聞社に入社し、紙面の編集を担当。7年後の昭和2（1927）年には編集局長となり、朝夕刊編集と論説を担った。戦後に公職追放となるまで、新聞記者生活は約30年にわたる。

連合国軍占領下の21年7月、月刊総合文化誌「地方文化」を創刊。25年に「生活と文化」と改題。48年に91歳で逝去するまで主宰した。

旭晃の最も重要な著作は「地方文藝史」（明治43年）だろう。自伝「逆境の恩寵」で、「地方文藝史」について「中央文壇を除く、北は北海道から南は九州に至る全国的の明治大正時代の文藝興亡史で、ほかに類似するものは無いから相当に好評を博し」と書いている。

「旭晃は自ら地方雑誌を発行するとともに、全国各地の文学青年たちと地方雑誌を団結させて『地方文壇』に『中央文壇』を凌駕する影響力を持たせようとしている」「地方が発展してこそ文化国家が成立するという信念にもとづく地方文化論を展開した」（林正子岐阜大学名誉教授）

32年間編集を担当した「教育新聞」、戦後は総合文化誌「地方文化」などで、中央文壇に対する地方文壇の存在意義を強調する論説を発表した。

「我国は永い間あらゆる制度が中央集権的であったがため中央の権威が強かった、それがため地方人はただ訳もなく中央主義に心酔し地方主義を軽視した。これを文化方面に見るに中央作家は舞台が良く普及宣伝にも効果が多いため

ことなくエライものに見えた、そして彼等も随分威張った、これは地方人の愚直が然らしめたものである、だが敗戦の結果はすべてが逆転し変化して来た」

(「地方文化」第12号、昭和22年9月刊)

旭晃の言うこうした状況が、全国に戦後無数に生まれた新聞雑誌によって、まさに現出したと言えるのではないだろうか。

4. 「ぎふ人民しんぶん」

時代は大正までさかのぼる。明治以来の藩閥政治に反発し、国民の意思を反映した政党政治を求める声が、都市中間層や労働者層を中心に高まった。自由主義・民主主義的な運動は政治だけでなく社会、文化分野にも広がり、後に大正デモクラシーと名付けられた。そうした風潮を背景に、大正後期から昭和初期にかけて農民運動や労働運動が高揚し、争議が頻発した。岐阜県内でも、各地の農村で小作争議が激化。大正14(1925)年には、岐阜市鶴田町にあった日本毛織岐阜工場、同市大宝町の後藤毛織で、相次いで待遇改善を要求する労働争議が起きた。

そのころの仲間たちが戦後、岐阜市徹明通(後に金園町)の岐阜人民新聞社に再結集し、昭和22(1947)年8月、「ぎふ人民しんぶん」を創刊した。創刊時のメンバーは社長加藤一次、総務児玉節、主幹稲葉忠雄、経理戸辺嘉久子ら。さらに坂井由衛、林繁一らが加わる。加藤、坂井、稲葉は日本毛織の労働者で、争議によって解雇されている。題字は創刊号のみ「岐阜人民しんぶん」だが、以降は「ぎふ人民しんぶん」となっており、それに従うことにする。



同年4月25日に行われた衆院選では、GHQによる民主化政策が追い風となり、解散時より40議席伸ばした社会党が比較第一党に躍進。自由党総裁の吉田茂に代わって社会党委員長の片山哲が第46代内閣総理大臣に指名され、民主党、国民協同党との連立内閣が成立した。左翼的な風潮が強まる中で創刊された「ぎふ人民しんぶん」は、最も旗色を鮮明にした。

加藤は3か月余りで社を去り、代わって児玉が社長に就任する。児玉は明治35(1902)年生まれ。浜松で歯科修行中に社会主義者と交遊し、運動の道に入った。帰郷後、後藤毛織争議を支援。「ぎふ人民しんぶん」紙上には、巖鉄の筆名で「岐阜県社会運動側面史」を連載した。

明治36年生まれの坂井は、日本毛織争議の指導者だった。解雇後、後藤毛織争議に協力し、大正15年には中部日本農民組合の書記に就任。機関紙編集と宣伝教育部門で活躍する。後に「ぎふ人民しんぶん」編集長となる下地は、このころ形成されたのだろうか。

稲葉は明治 40 年生まれ。大正 13 年、坂井、児玉らと「中部青年同盟」を結成し、機関紙「中部青年」の発行編集兼印刷人。治安維持法違反で逮捕され未決生活 2 年半の後、転向。印刷、土木、鉄工、紡績などの労働者、映画の弁士、餅菓子行商、株式外交員などいくつもの職業を転々とした。満州に渡り、夫人は戦後満州から連れ帰った。

こうした筋金入りの面々によって始められた「ぎふ人民しんぶん」は、民主的、左翼的な主張を貫いた。大正デモクラシーの思想と運動は、戦時体制下で影を潜めたものの、GHQの民主化政策の中でよみがえった。

「ぎふ人民しんぶん」は、昭和 22 (1947) 年 8 月 1 日付創刊号 1 面に、「誰ぞ！人民の敵」との見出しの「主張」を掲げた。「国と人民を今日の悲惨に追いやったのは軍閥と旧財閥、そして官僚である」と決め付けた。さらに「今日残された敵は官僚群である。(略) 地方政治の真の民主化なくして国の民主化はありえない」と、当時の武藤嘉門知事とその周辺を監視し、徹底的に打倒することを求めた。

続く第 2 号では、4 月に当選したばかりの東前豊（ひがしまえとよ）岐阜市長が、戦時中に大政翼賛会支部事務長の職にあったことを隠して立候補したと暴露。公職追放基準に該当するとして、毎号キャンペーンを張った。

その後も 1 面に「岐阜場所 財産税脱税番付」「ヤミ建築摘発番付」を実名で掲載するなど、気を吐いた。

風刺やユーモアに富む記事もあった。「亡霊座談会」と題した連載には、幸徳秋水、山本宣治、大杉栄、伊藤野枝、難波大助ら「白色テロに斃（たお）れた同志」が登場。それぞれの事件の真相を語り合い、大杉らを殺害した甘粕正彦憲兵大尉を人民裁判にかけようとする。

24年1月の総選挙では、共産党が前回4議席から35議席に躍進した。その前後から紙面に共産党色が強くなったとの批判に対しては、「県下唯一の民主的新聞」であり、「最近目に余る一般商業新聞の反動性」こそ問題だと主張している。

24年を境に、新聞の数は急減し、地方紙、新興各紙とも紙面に精彩を欠くようになった。「ぎふ人民しんぶん」も例外ではなく、25年9月には「濃飛タイムズ」と合併し「東海さきがけ」と改題すると発表した。稲葉忠雄は、元東海夕刊（現岐阜新聞）編集長の瀧川憲三を社長・編集兼発行人として招へい。左翼色を払しょくし、一般向け大衆紙を目指した。

25年10月25日付創刊号の1面準トップには、公職追放が解除された平野増吉元代議士、松尾国松元岐阜市長の対談を掲載。武藤嘉門県政に対しては批判的なスタンスを取ったものの、社会党左派や共産党支持の論調は影を潜めた。

25年6月、マッカーサー占領軍総司令官の書簡を受けた吉田茂内閣が共産党幹部や機関紙「アカハタ」幹部らの公職追放を決定。7月下旬以降は大手新聞社や通信社、NHKが、社内の共産党員や同調者を追放した。さらに9月には閣議決定により、報道機関だけでなく官公庁や教育機関、大企業などでも同様の解雇・追放が行われた。いわゆるレッドパージで、「ぎふ人民しんぶん」の改題、方向転換の時期と一致している。

一方、稲葉の現実的路線をよしとしない児玉節、坂井由衛、林繁一らは退社。11月、北原泰作らとともに「東海民報」を立ち上げた。

編集・発行・印刷人となった北原は、明治39（1906）年岐阜市生まれ。全国水平社運動に参加し、部落解放のため活動。昭和2（1927）年11月、岐阜歩兵六十八連隊時代に、名古屋城東練兵場で軍隊内の差別撤退を天皇に直訴した。世に言う北原二等兵天皇直訴事件で、逮捕され1年間服役している。

北原によると思われる「創刊のことば」では、「働く国民大衆の立場に立ち、しかも一党一派にかたよらず、つねに真実を報道（する）」と宣言した。

「東海さきがけ」は、社長の瀧川憲三が26年退社し、専務だった稲葉が社長に就任。元岐阜タイムス（現岐阜新聞）整理部長の大喜正一が編集人となった。武藤嘉門知事を徹底的に批判し、政敵とされた平野増吉元代議士に肩入れした。28年春、「東海さきがけ」は「岐阜夕刊」に改題し夕刊紙となる。さらに雑誌「中ニッポン」創刊へと転変を続けた。

一方の「東海民報」は、「ぎふ人民しんぶん」のスタンスを継承した。地方政治の腐敗を告発し、民主戦線統一の論陣を張った。全国的著名人の寄稿を掲載したのも、この新聞の特筆すべき点だ。野間宏（作家）、羽仁五郎（歴史家）、市川房枝（婦人有権者同盟会長）、中村翫右衛門（前進座俳優）、河原崎國太郎（同）、岩崎昶（映画評論家）、ねずまさし（歴史学者）、江口渙（作家）らそうたる顔触れで、部落解放運動で知られる北原が声を掛けたと思われる。

県職員の汚職事件が相次ぐ中、同紙も武藤嘉門知事への批判を強め、北原は26年4月の県議選出馬を表明する。どんな事情があったかは不明だが、公示直前に出馬を撤回した後、間もなく退社した。在籍は1年4か月ほどだった。

「東海民報」は月刊紙として現在に至っている。戦後生まれた地域紙の大半が消滅した令和の現在、岐阜市と近郊地域では唯一の存在だ。かつての左翼的論調ではなく、現社長によれば「是々非々の報道姿勢」で発行を続けている。

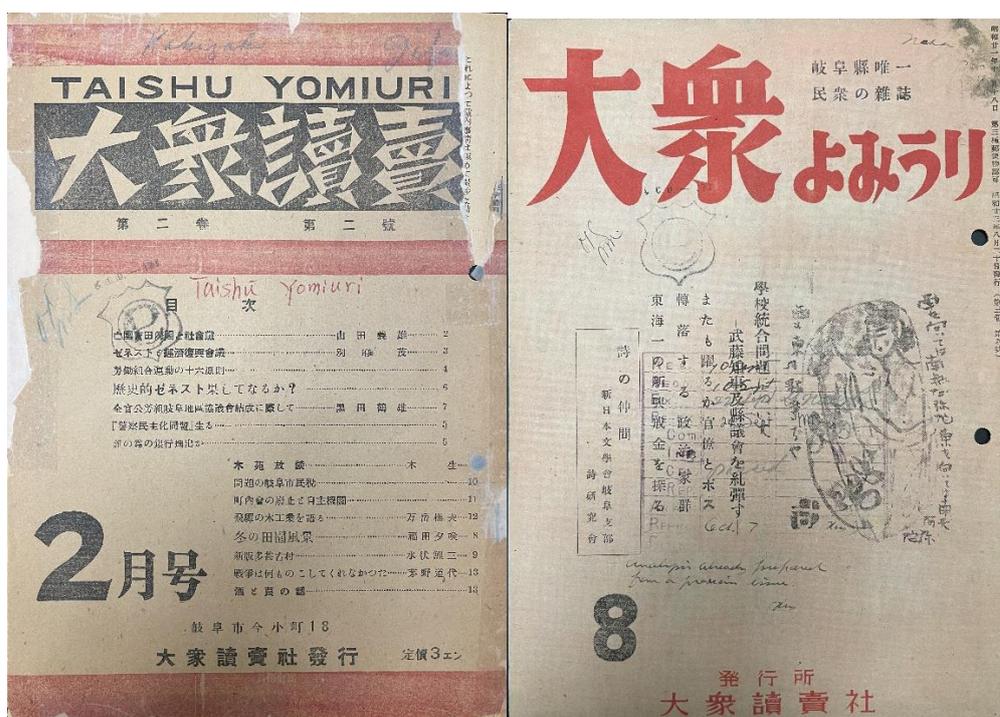
5. 「大衆讀賣」

総合雑誌「大衆讀賣」は、昭和21（1945）年秋の創刊。発行所は岐阜市今小町の大衆讀賣社。発行兼編集人は山田義雄。B5判で16ページ建てを基本とした。印刷所は若山印刷所。定価は5円だった。

残念なことに、「大衆讀賣」の創刊号は現存が確認できない。岐阜県図書館に所蔵されているのは、22年新年号から数誌。プランゲ文庫にあるのは、同年2月号から23年12月号（通巻18号）まで。22年10月号を創刊1周年記念号と銘打っていることから、創刊号は21年10月号と推測される。

「岐阜市史」には、表紙の写真付きで以下のような記載がある。

「総合文化誌『大衆讀賣』は、戦後の民主社会の文化運動を目的とした総合雑誌で、山田義雄を代表とし木下勲・別府茂などを編集者とした月刊誌で、用紙の不足に苦しみながら、社会の前時代的勢力克服のための論陣を張った当時唯一の地方誌であった」（通史編 現代 第10章文化）



山田の人物像は、断片的にしか分からない。大衆讀賣社の所番地には、天保元（1830）年から続く老舗和菓子屋の奈良屋本店が今も店を構える。店の歴史を書いた冊子によれば、昭和8年に亡くなった3代目山田留次郎には息子がいたが、司法省（現法務省）に勤務しており娘婿が家業を継いだ。現在の当主夫妻は山田義雄のことも「大衆讀賣」のことも聞いたことがないという。

主筆の木下勲は、戦前に岐阜新聞編集局長を務めた木下彰（俳号青嶂、岐阜俳句協会会長）の弟。後に「寿探偵新聞」を経て「寿タイムス」を主宰する。

「木苑」の筆名で「木苑放談」「木苑毒舌」などのコラムを書き続けた。22年12月号から宮崎博が加わる。「白面零人」の筆名で、後に「東海民報」でも健筆を振るった。木下、宮崎という岐阜の戦後小新聞界の論客が、「大衆讀賣」で机を並べていた。

山田や木下は昭和初期、岐阜市日ノ出町にあった喫茶店「赤い茶屋」の常連で、詩人の岩間純ら文学仲間と詩や短歌の同人誌「微光」を発刊したという。

「赤い茶屋」は柳ヶ瀬で初めての純喫茶。左翼青年や文学青年のたまり場で、知識人もよく足を向けた。山田らは大正モダニズムの流れを受けながら、多感な青春期を過ごしたと考えられる。

「大衆讀賣」初期の21年秋から22年前半にかけては、日本の民主化を進めるGHQの労働組合育成方針のもとで、労働運動が高揚した。全官公庁共闘に民間の産業別労組も呼応し、2月1日のゼネストが宣言された。

直前に発行された2月号で山田は、「亡国吉田内閣と社会党」と題した巻頭論文を執筆。「民主人民政府樹立に乗り出すことを要望する」と踏み込んだ。「歴史的ゼネスト果たしてなるか？」との見出しで、岐阜県内の情勢に見開きページを割いている。

2月1日のゼネストは賃上げや待遇改善要求にとどまらず、内閣打倒の政治運動の様相を強めた。GHQのマッカーサー最高司令官は1月31日夕、中止を指令。ゼネストは土壇場で回避された。

ゼネスト回避後の翌3月号巻頭では、「日本国の動向を決する4月の選挙」と題して、熱っぽく訴えている。「世界注視の的である真に民主化された文化国家日本国の建設が果たして5月3日を期して発足する新憲法を精神を生かし

たものとなるかならないか それは 4 月の選挙が左右を決するのでありわれわれ一人ひとりの肩にかかっているのである」。

新憲法施行を目前にした 22 年 4 月、新憲法の理念を前倒しする形で、衆院選、参院選、初の統一地方選が次々に行われた。このうち統一地方選は、住民の直接選挙による地方自治制度の導入を求める GHQ の方針に沿って実施された。岐阜市議選には定数 40 に 128 人が名乗りを上げるほど、岐阜県内でも政治参加熱は高かった。新聞・雑誌関係者も 10 人ほどが立候補。「大衆読賣」からは社長の山田義雄が岐阜県議選と岐阜市議選に、総務の別府茂が同市議選に出馬した。同日投票の県議選と市議選への重複立候補は、当時の制度では可能だった。

結果は甘くなかった。山田は定数 5 の県議選岐阜市選挙区で立候補者 19 人中 18 位、岐阜市議選 59 位、別府は 103 位に終わった。

選挙前の 2 月 20 日、「大衆読賣」は第 1 回文化座談会を主催した。会場は岐阜市役所。終戦直後の岐阜の文化・言論界をリードした文化人、知識人が顔をそろえ、同誌の常連寄稿者が多く含まれている。主な発起人・出席者を紹介しよう。

元駐ドイツ総領事の織田寅之助は外交官歴が長く、後に洋画家、評論家。院展特待画家の長谷川朝風は俳人としても知られ、県俳句作家協会設立に尽力した。兄は俳人、英文学者で元岐阜薬科大教授の長谷川双魚。

ボードレールなどの翻訳で知られる慶応大教授で仏文学者の高橋廣江は、戦争で帰岐したまま東京には戻らず、戦後は岐阜大教授。

清信重は衆院議員清寛の長男で、東海夕刊、岐阜タイムスで記者、論説委員、労組執行委員長などを歴任。後に県図書館長。「ふるさと岐阜の物語」などの

著書がある。「大衆讀賣」には県労働委員の肩書で「労働組合講座」を連載した。

越中谷利一はプロレタリア作家。岐阜駅前の繊維問屋街で古着屋を経営し、後に「東海繊維経済新聞」を創刊する。

木下彰（章）は戦前に岐阜新聞編集長を務め、俳号青嶂。「大衆讀賣」の木下勲の兄。この岐阜新聞は、岐阜日日新聞（現岐阜新聞）の対抗紙だった濃飛日報を大正14年に清寛が買い取り、改題して夕刊紙とした。

赤座憲久は後に児童文化誌「コボたち」同人。児童文学の著書多数。

座談会には参加していないが、土川修三（元高山市長、弁護士）、福田夕咲（作家）、玉井茂（岐阜大教授）、江口三五（弁護士）、辻欣一（詩人）らの名前も同時期の各紙誌に見られる。現代の岐阜に論壇と言えるものは存在しないも同然だが、当時はこうした論客たちが積極的に寄稿し、議論を戦わせていた。座談会は3月号に4ページに要約して再録されている。仮名遣いや漢字制限の話題から始まり、美術界、文化運動の在り方などに及んでいる。各界から出席者を集め過ぎたせいか、議論が深まらず散漫な印象は拭えない。4月に選挙を控えていたが、政治的な話題には触れていない。

同じころ、姉妹紙として「岐阜市民タイムス」の発刊が企画された。2月号の社告では「15万岐阜市民の機関紙」をうたい、各校下ごとの民主的な編集委員によって市民の声を紙面に直結させる「市民自らの手によって編集される新聞」を目指すとした。翌3月号には、用紙難により創刊を延期するとの社告を掲載。発刊にこぎつけたのは7月だった。

第2号がプランゲ文庫に残されている。週刊で2ページ建て。「免れない父兄の負担 新生中学に煮えきらぬ政府」とのトップ記事はあるものの、市広報のような短信で埋められている。4号で休刊となったようだ。

昭和 23 (1948) 年に入っても、「大衆讀賣」の発行は続けられた。前年末に編集主任として加わった宮崎博がフル回転した 2 月号では、自ら執筆した「長良川島地内 廃川敷地事件の真相」を表紙題字下から始まる形で掲載。精神病院や母子寮への潜入ルポ、越中谷利一「ハルピン街の生態」、戦前の労農運動活動家坂井由衛の「岐阜農民闘争史」連載開始など硬派企画を繰り出し、沈滞気味だった誌面は生氣を取り戻した。

精力的な誌面づくりとは裏腹に、「大衆讀賣」の発行は順風満帆ではなかった。赤か青を使った 2 色刷りの表紙に、多いときは 36 ページ建て。公称 5,000 部。資金繰りは楽ではなかったと推察される。定価は 3 円から 5 円、10 円、15 円、20 円と値上げを繰り返し、30 円になった。

印刷会社は当初の若山印刷から新協社へと変わった。発行所も狭い範囲内だが転々とした。

6 月号は休刊し、遅れて発刊にこぎつけた 7 月号で山田は吐露している。「真面目な雑誌をと考える事が、或いは商業主義的文化の流行からいえば、お目出たい考えかもしれないが、歴史の中にある星はやがて雲間を破って光輝く日のあるという事を信じて、吾吾（われわれ）はあくなき前進を誓うしだいです」。

9 月号では、「株式会社に衣替えし、新年号を期して全国誌とする計画を進めつつある」と打ち出した。

通巻 18 号となる 2 周年記念号は、約 2 ヶ月遅れて 12 月 20 日付で出された。総選挙特集を組んでいるものの、熱量は明らかに下がっている。

巻末の次号予告では、「新春特大号」として「趣向を変えて堂々と再出発する。特ダネ、実話、バクロものなどで東海唯一の大衆雑誌とする」と宣言。目次には戦争秘話、犯罪実話などを並べた。当時隆盛だったエログロが売り物のカストリ雑誌を目指したのだろうか。「岐阜県唯一の民衆の雑誌」からの、驚

くほどの急旋回ぶりだ。執筆陣に木下、坂井、宮崎らの名前はない。この号はプランゲ文庫にも岐阜県図書館にも所蔵されておらず、発行されたかどうか確認できない。

「大衆讀賣」後の山田が他の新聞や雑誌に関わった形跡は見つけれず、どこで何をしていたのかは分からない。

25年、GHQは民主化方針を一転。日本共産党幹部や党员、支持者を職場から追放するレッドパージを日本政府に実行させるなど、急激に右旋回した。翌26年、マッカーサー総司令官はトルーマン大統領によって更迭され、日本を去った。「大衆讀賣」の終刊後、山田は戦後をどう生きたのか、民主日本建設の理想と現実をどう感じていたのか。今となっては知るすべがない。

6. カストリ雑誌の総合商社

昭和21(1946)年11月創刊の「岐阜青年新報」は、プランゲ文庫だけでなく岐阜県図書館に大半が残されている。月2回発行で4ページ建て。発行所は岐阜市柳ヶ瀬4丁目(現在の柳ヶ瀬通1)の石神書店で、第4号から同書店内の岐阜青年新報社となっている。

発行人の石神安雄は、大正3(1914)年、郡上郡西和良村小那比(現郡上市)に生まれた。小学校卒業後、岐阜市に出て書店の博文堂に小僧として入り修業。昭和5(1930)年、店主の実弟矢崎正治が独立して同市神田町に大衆書房を創業した際、一緒に移った。大衆書房は後に郷土出版を数多く手掛け、矢崎は新聞に意見広告を出すなど名物店主となる。

石神自身も23歳で独立し、官庁街の今沢町に華陽堂書店を開業。学校教科書や和漢古書籍の販売も手掛けた。出版社も兼ね、戦前の昭和13、4年には漢詩人森春涛の詩集「岐阜雑詩」や「日本竹枝詞集」(上中下、伊藤信編)などの

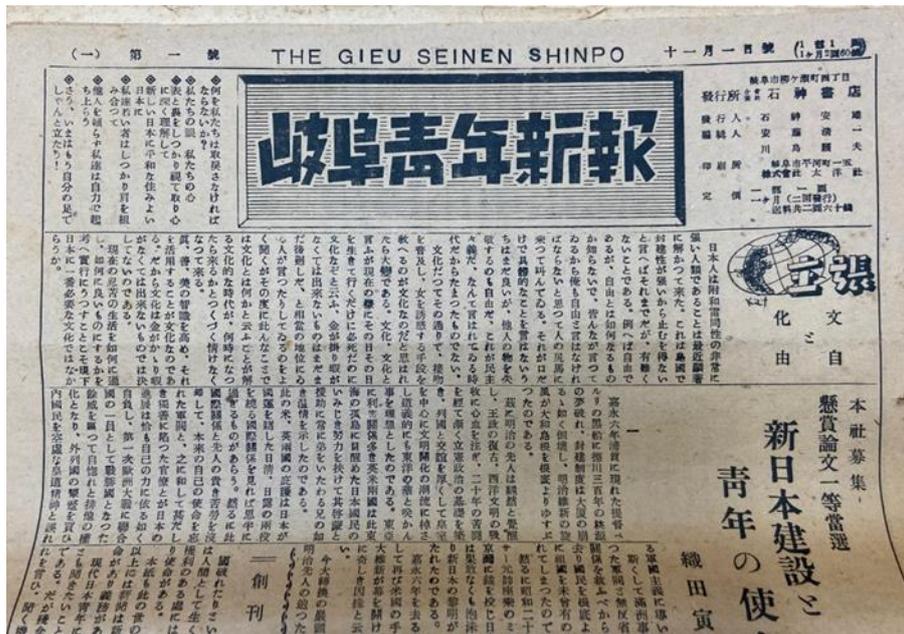
専門書を出版。戦時中は「子供と修練」「飛騨文化史概観」「女子慰問手紙文」「愛国百人一首解釈」「初年兵」「若桜 第二次特別攻撃隊」など戦意発揚の潮流に沿ったものを中心に次々に出版した。店名は華陽堂書店から華陽堂石神書店、さらに石神書店へと変えていった。所在地も繁華街の柳ヶ瀬に移っている。



「岐阜青年新報」創刊の21年11月は、戦後岐阜の小新聞としてはかなり早い。創刊の辞で石神は「青年がお互いに本紙を通じてがっちりと手を握り合っ
て、新日本建設のために前進していただきたい。(略)本紙は事業として座談
会、研究会、討論会等の各種文化運動を計画中である」として、「本紙は無党
無派であることを明言しておきます」と結んでいる。

1面に大きく掲載されているのは、本社懸賞論文一等当選作の織田寅之助
「新日本建設と青年の使命」。織田は岐阜市在住でポーランド留学後、外交官
として欧州各地に勤務し、ドイツで終戦になり帰国した人物と紹介されている。
画家でもあり、江崎寛友とともに示現会岐阜支部を創設した。

2面には高山市の詩人福田夕咲、戦前の岐阜日日新聞（現岐阜新聞）編集局
長などを務めた小木曾旭晃らが祝辞を寄せている。3面には随想やコント、小
説を掲載。終面は詩や短歌、俳句などの文芸や映画評などの文化面としている。



他紙が用紙確保に苦勞し、号によって減ページや判型を縮小したりする中、ほぼ月 2 回のペースを守って発行された。弁護士で後に岐阜ユネスコ会長となる江口三五、岐阜タイムス（現岐阜新聞）幹部で歌人の川出宇人らが寄稿。青年団活動や公民館建設問題に紙面を割いた。岐阜青年新報社社員として記載されている鈴木博信は、後に岐阜日日新聞校閲部長となり、俳人（俳号薄多久雄）として活躍する。

石神は 22 年 4 月 30 日投票の岐阜市議選に立候補した。戦後日本の民主化をかけた全国統一選挙後半戦の地方議会選だった。岐阜市は定数 40 に対して 128 人が出馬。石神は「青年の求めている公民館に一銭の予算も出さぬような文化運動に無関心の市会を撤廃し文化人の市会をつくり、文化運動をそく進する」（「岐阜青年新報」）と訴えた。獲得票数 192 票は最下位当選者の 660 票に遠く及ばず、110 番目であえなく落選した。

そんな石神と石神書店だが、全く別の顔があった。性や性風俗（エロ）、猟奇的事件（グロ）などを売り物に、戦後の 21 年から 24 年ごろにかけて全国で続々と発刊されたカストリ雑誌の出版元としての顔だった。

石神安雄が経営する石神書店は、昭和 22 (1947) 年、「お定色ざんげ」(6 月刊)、「末摘花(すえつむはな)」(4 月刊) などの単行本を出版した。前者は、昭和 11 年に起きた阿部定事件を題材にした小説。料亭の仲居をしていた女性が愛人を殺害し、局部を切断して逃走した事件で、その猟奇性から社会的注目を集めた。後者は男女の愛や性的な風俗を詠んだ川柳を集めた句集だった。

さらに同年 9 月には、カストリ雑誌「オール猟奇」を創刊した。戦時中の抑圧から解放され、全国で続々発刊されたカストリ雑誌は、性風俗や犯罪実話を取り上げた読み物で埋められていた。タイトルにうたっているものの、猟奇色は薄く、性的な題材の小説が多いのが特色だった。



石神書店は警察当局の目を避けるためか、「オール猟奇」を「オールナイト」「リーベ」などと改題または創廃刊し、また元に戻すなどした。「オール猟奇」以外にも、「猟奇読物」「綺談」「夜話」「シーク」などの雑誌を次々発刊し、出

版社名も「耽美社」「爛美社」などの変名を使った。何度も摘発され、警察とのいたちごっこの様相を呈した。いわばカストリ雑誌の総合商社といった存在で、全国に知られた。

これほど多くの雑誌を出せた背景には、用紙のヤミルートを押さえていたことが推測される。長良川流域の美濃市は美濃和紙の産地で、水運を生かして岐阜市に集積された。戦時中は軍関係の用紙が備蓄され、戦後はヤミに流れたと考えられる。石神は現在も赤本でしられる印刷会社と組んで、カストリ雑誌など大量の出版物を岐阜で印刷していた。

注目したいのは、「岐阜青年新報」創刊は昭和 21 (1946) 年 11 月で、「オール獵奇」創刊の 22 年 9 月より 1 年近く早いことだ。カストリ雑誌で知られたことから、「岐阜青年新報」は隠れ蓑だったとの見方をされるかもしれないが、時系列的には成り立たない。

青年向けの健全な新聞と、性を売り物にした単行本やカストリ雑誌。この矛盾する両面を表現するかのように、「1950 年版岐阜県興信録」(岐阜人民新聞社刊) で石神は、「地球を半分に割り またくくりつけるような文化的な仕事をしたいと思う」と抱負を記している。

「岐阜青年新報」は 22 年 8 月、「青年ジャーナル」と改題した(改題初号のみ「青年ジャーナル」と表記)。改題前より寄稿者が増え、当時の岐阜を代表する文化人たちに混じって、漫画家・文筆家岡本一平、作家小島信夫、野球指導者飛田穂(すい) 洲ら全国的著名人が登場する。岡本は岡本太郎の父で、太平洋戦争末期に加茂郡白川町に疎開、戦後は同郡古井町下古井(現美濃加茂市)に移り、23 年 10 月に当地で没するまで文筆活動を行った。「青年ジャーナル」への寄稿は、最晩年の文章と言えるだろう。

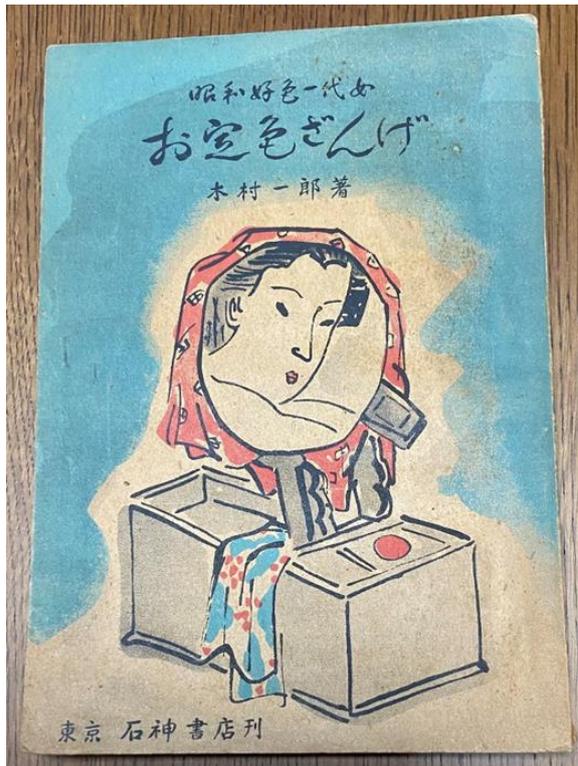
「オール獵奇」などをヒットさせた石神書店に追随かのように、昭和 23 (1948) 年から 24 年にかけて、岐阜市内の各出版社からカストリ雑誌が続々と発刊された。「ラブファン」「ロマンス世界」(双葉社)、「ベーゼ」「肉体」(櫻文社)、「オール夜話」「好奇実話」(緑文社)、「歓楽の泉」「赤裸々」(栄光社)、「抱擁」(ホーヨー社)などで、岐阜はカストリ雑誌のメッカとして知られた。



さらに東京の世相研究社から出された「獵奇ゼミナール」は、岐阜市の双立社が印刷・発売元で、編集兼発行人は後に直木賞作家となる豊田穰。満州生まれだが本巣郡本田村(現瑞穂市)育ちの豊田は、海軍飛行将校として太平洋戦争に従軍。米軍の捕虜となり、帰還後に中部日本新聞(現中日新聞)文化部記者として岐阜に勤務した。職業軍人の公職追放で一時離職しているあいだ、双立社に入社。ほかに「艶麗」でも編集兼発行人を務めている。同誌は創刊号を「いれずみ大特集号」と銘打つなど、異彩を放った。

7. さながら「梁山泊」

石神書店に戻って、その歩みをたどってみよう。石神書店とその社長石神安雄の名を全国区にしたのが、22年6月発行の単行本「昭和好色一代女 お定色ざんげ」。石神自身が、後に発行を引き受けた在京岐阜県人会機関誌「濃飛人」(33年2月号)で、当時を振り返っている。



旅先で阿部定の裁判調書の複製本を読み、小説にしたら売れると計画。1万部印刷したが半分も売れない。困って「たちまち10万部突破」と印刷した帯カバーを付け、東京の書店に委託した。それを見た阿部定の知人が、そんなに売れたならと弁護士と相談して、謝罪金を出さなければ名誉棄損で告訴すると言ってきた。騒動を聞き付けた全国紙が社会面トップで報道。その日の午後には注文が殺到して在庫はなくなり、すぐ4万部増刷した。警視庁から待ったが掛かったが、押し問答の末に開き直ってその後も増刷し、売り切った。後日、担当の警部補から「いい度胸をしている。田舎には惜しい。ぜひ東京に出てきて

やれ」とほめられた。少しい気になって、東京に事務所を構えるようになったという。

こうして「お定色ざんげ」は本当に10万部の大ヒットとなり、石神書店は相前後して「オール獵奇」「リーベ」などカストリ雑誌を次々に発刊する。「オール獵奇」22年10月号には「お定色ざんげ」の著者木村一郎インタビューを掲載。裏表紙には同書の広告を載せ、「阿部定さんが訴え 今や全日本話題？」とのコピーが添えられている。今でいう炎上商法だろう。

「昭和好色一代女 お定色ざんげ」は、昭和63(1988)年に河出文庫(河出書房新社)から復刻された。監修者の発禁本研究家・城市郎は「お定に寄り添うようにして心の内を描いており、いま読んでもみずみずしさの感じられる作品である」と評価している。

昭和25年夏、発禁処分となり話題を呼んでいたD・H・ロレンス作、伊藤整訳「チャタレイ夫人の恋人」(小山書店)の偽造本が取引される騒ぎがあった。警視庁は積み込み作業中のオート三輪を東京駅八重洲口付近で発見し、上下巻4,600部を押収。その発行元を岐阜の石神書店とみて捜査したが、石神らは否認を続けた。石神は岐阜タイムス(現岐阜新聞)広告欄に声明書を発表し、「知己諸賢の御信頼にそむくがごときことは決して致さない」とした。結局、警視庁は確証をつかめず、あいまい決着となった。

石神と石神書店に対して、各紙誌は厳しい目を向けた。「岐阜の恥辱、文化の敵」(「ぎふ人民しんぶん」)。小新聞や雑誌の動向を温かく見守った小木曾旭晃でさえ、「生活と文化」誌で、「出版倫理ぐらいは守らねば岐阜県人のツラ汚しだ」と憤っている。石神は岐阜の新聞・出版業界において異端の存在だった。好意的なのは、戦前からの新聞人高田範幸の「さきがけ新聞」くらいだった。

「今売り出しの人気者」と立志伝風に紹介している。

石神安雄率いる石神書店の周辺には、さまざまな人々が集っていた。全国で刊行された膨大な数のカストリ雑誌の中で、石神書店の各誌が一定の水準を保っていたのは、彼らによるところが大きいだろう。

石神の盟友的存在で、小説「昭和好色一代女 お定色ざんげ」を執筆した木村一郎は、本名日吉春雄。出身地、生年ともに不明。カストリ雑誌に関わる以前は、どのような前半生をたどったのだろうか。意外なところに痕跡があった。

大正中期には東京にいて、印刷工場で働きながらアナキストの大杉栄や渡辺政太郎の周辺で活動していたらしく、「大杉栄自叙伝」の大正8（1919）年2月の項に名前が出てくる。社会主義者の荒畑寒村、演歌師の草分け添田啞蟬坊や、アナキスト、組合活動家などそうそうたる面々とともに「北風会」に属していた。

3年後の11年には、東京・深川の道草社が出していた文芸同人誌「道草」に、短編小説「春雨の夜」や詩「流浪者より」を発表している。同誌に政治色はない。

後年、カストリ雑誌「ベーゼ」に掲載した随想「質屋と子供」には、妻や幼い子2人と新宿の裏に住んでいたころの質屋通いのエピソードが語られ、「それから幾年か過ぎて、私たちは東京の生活を逃れて岐阜へ移り住んだ」とある。それがいつで、石神とどこで結びついたかは分からない。

戦後の昭和22（1947）年に創刊された業界紙「岐阜印刷出版情報」（岐阜印刷出版情報社）では、編集兼発行人を務めている。同年に石神書店から出された「末摘花」編者、「昭和好色一代女 お定色ざんげ」の著者として名前を売り、さらにカストリ雑誌「オール猟奇」の編集に当たった。40代後半だったと思われる。

「お定色ざんげ」を「(下品で) 文筆家じゃない」などとけなした無頼派の人気作家坂口安吾に対して、木村は「オール獵奇」23年1月号に反論を掲載。阿部定に告訴されてから20数種の雑誌、新聞社から原稿を求められたが応じなかったとし、「もし私が、坂口安吾氏のような文筆家であったならば、原稿料ほしさに、どんな恥知らずの芸当でも演じることができ、また原稿料もたんまり入ったろうと思う。しかし私の良心はそれを許さなかった」と怒っている。

昭和23(1948)年春には石神書店を離れ、櫻文社に移籍。「軟派娯楽雑誌」と銘打った月刊「ベーゼ」を主宰した。同年9月号では、カフェやダンスホールにたたずむ女性たちを描いた長谷川中央による巻頭口絵に、「エロ本は追放したけれど」と題する詩を添えている。

「人間の生活から エロティズムを奪い去ったら 人間の体に何が残るだろう
潤いがなくなり 柔らかさを失い 喧嘩や戦争がしたくなるのではないだろうか」

エロ本と片付けられがちなカストリ雑誌だが、表紙に「木村一郎主宰」と明記して自己表現の場とした木村の主張であり、自己弁護でもあっただろう。無数のカストリ雑誌に集った文学青年崩れたちを代弁しているようにも感じられる。

カストリ雑誌ブーム終えん後の木村は、印刷会社を転々とする。岐阜文芸社の会長飯尾寛が、同社に入社し勤め上げた日吉(木村)を覚えていた。東京から流れて来たらしく学があり、英文の植字は彼にしか組めなかった。無類の酒好きで、晩年は浮浪者のような風貌になっていたという。30年4月3日死去。

「オール獵奇」をはじめ「リーベ」「夜話」など石神書店とその変名出版社発行カストリ雑誌の表紙絵には、「H. C h u O」の署名が入れられているもの

が多い。描いたのは長谷川中央。当時のカストリ雑誌は稚拙で品のない表紙が多いが、長谷川は独特の画風で女性を魅力的に描いた。

長谷川は岐阜タイムス（現岐阜新聞）に入社し、タイトルカットなどの図案を描く製版部に所属した。後に労組委員長、営業部長、取締役業務局長などを務めた。

石神書店の一連の出版物の執筆者としては、平塚正雄を挙げたい。戦前から戦後にかけて印刷業兼出版業を営み、在野の郷土史研究者として活躍した。

昭和 7（1932）年、父の跡を継いで岐阜市笹土居町の印刷会社「一信社」の経営者となった平塚は、やがて出版部を設立。月刊誌「郷土史壇」を創刊し、編集発行兼印刷人、主幹を務め、岐阜の地域史や習俗に関する投稿や、岐阜県庁倉庫にあった古文書を掲載した。自らも商業・産業史に関して精力的に執筆し、ほぼ毎号誌面を飾った。特に富籤（くじ）に関心があり、関連する論考を発表した。

一信社のもう一つの大きな柱は、郷土史料の復刻。平塚は営利を度外視して、「新撰美濃志」「濃州徇行記」など江戸期の史料を「美濃大史料文庫」シリーズとして出版した。文選、植字、校正などの作業も自ら行った。

世のカストリ雑誌ブームは長くは続かず、昭和 24（1949）年には終えんを迎えた。代わって夫婦生活をテーマにした雑誌が隆盛となる。従来の B5 判型から小型の B6 判型に変えてページ数を増やした。石神書店の各カストリ雑誌も同年中に発行が途切れ、時流に合わせて月刊誌「完全なる夫婦の生活」を同年 10 月創刊。途中で夫婦文庫社と社名を変えて 26 年ごろまで続いた。

青年向け新聞「青年ジャーナル」も、同年 9 月までしか発行が確認できない。編集人を務めた椿信太郎は、「怪人物」などと一部で語り継がれたが、実像やその後の消息は分からない。

カストリ雑誌や単行本で財を成した石神安雄は、岐阜・柳ヶ瀬の丸物百貨店（岐阜近鉄百貨店を経て現中日ビル）の北向いにあった石神書店のほかに、東京・神田の須田町に石神会館をオープンさせていた。

岐阜の石神書店も東京と同名の石神会館となる。2階の喫茶部は純喫茶「龍」となり、コーヒーの味は評判を呼んだ。昭和42年11月には、それまでの木造から、地下1階、地上5階建てビルに新築している。

元新聞記者で文筆家の土屋英麿が、在京岐阜県人向け情報誌「濃飛人」（昭和51年11・12月号）に、柳ヶ瀬の石神書店について書いている。

およそ文化人という連中はみなこの店から生まれたと言っても過言ではない。石神書店はある意味で当時「梁山泊」だった。天下国家を論じる政治青年、文壇進出を夢見る文学青年、黙々と本を読んでいる青年や学生。みんな金がないが本が好きで、「石神さんたのみますよ」と後払いで買っていく。多くは金を払いに来ない連中である。しかし一方で石神氏は巨万の金を集めて大成功しておられたから、子分の持ち出し本ぐらいは何とも思っておられなかった。

元岐阜新聞文化部長の高橋健によれば、石神書店には各界人が集まり、県芸術文化会議や県ユネスコ協会の設立準備が進められたという。

石神は東京高速印刷社長、東京郡上会会長などを務め、36年ごろに石神書店をたたんだ。51年、「濃飛人」発行に長く尽力した栃藤浩文の引退に伴い、後を引き受ける。故郷への思いが強く、地元の熊野神社の祭りには衣装を寄贈し、毎年のように帰郷した。

52年、石神は脳血栓に倒れ、なんとか「濃飛人」の発行を続けたものの、55年3・4月合併号を最後に休刊した。

一代の「風雲児」、石神安雄は、昭和62年にその生涯を閉じた。岐阜市の石神会館ビルは、柳ヶ瀬の街おこしに意欲的な若手経営者が買い取り、令和元

(2019)年、1階で紳士服テーラーを開業した。店舗横の階段の各階案内板には、「石神会館」のプレートが今も残されている。

※この後、「復興期の一」は岐阜県内各地で出された新興新聞群について、地域別やジャンル別に紹介。政財界を巻き込んだ地方紙の分裂騒動、魅力的な新聞人列伝、新聞人や文化人が集ったサロンのスポットなどを取り上げている。

8. 令和に続く流れ

若年層の新聞離れが言われて久しい。全国紙、地方紙、専門紙を問わず、発行部数の減少に歯止めが掛からない。ウェブ版（電子版）への移行が模索されてきたが、ビジネスモデルとしての成功例はいまだ見出されていない。一方で、都道府県をカバーする地方紙よりさらに小規模な、地域を対象とした新聞はどうか。戦後の岐阜で多数創刊された新聞群のうち、令和の現在まで続いているのはごくわずかだが、全国紙、地方紙よりミニマムな地域紙に、新聞の可能性を見出せるかもしれない。

「高山市民時報」は、昭和23（1948）年3月創刊。平成の大合併によって日本一の面積に広がった高山市全域をカバーしている。現在は週3回、月水金曜日に発行。コロナ禍でニュースが減り部数を落としたが、市内では中日新聞や岐阜新聞、全国紙をしのいで普及率1位を誇る。

特筆すべきは、全国的に夕刊が休刊、廃刊となる例が多い中、創刊時から一貫して夕刊時間帯に発行していること。16時から17時ころ、刷り上がった新聞がアルバイトの配達員約70人によって家庭に届けられる。

日本固有とっていい宅配制度だが、配達の人出不足によって、販売網の維持は困難に直面している。市民時報が多数の配達員を確保出来ているのは、朝刊配達の早朝時間帯より主婦や高齢者が働きやすい夕方だからだという。

仕事を終えて帰宅した夕方、届いたばかりの市民時報を広げて、くつろいで活習慣として、今も家庭に根付いている。

紙面は徹底した生活情報で埋められている。市内で起きた事件事故などのニュースも載せるが、大きくは展開しない。野澤社長は「猫がいなくなった」「落とし物が届いた」といった記事が特徴と笑う。

昭和 32 (1957) 年創刊を掲げる「東濃新報」は、多治見市に本拠を置く週刊紙。スポンサーや株主は陶磁器、タイル関係が多く、地場産業に支えられてきた。新聞、メディアというよりは「地域業」「地域新聞業」を自覚し、人とのつながりを大切にしている。

政治、経済など地域の課題について掘り下げ、1 面トップで展開する。地域を盛り上げ、発展させたいとの思いで積極的に提案、提言し、オピニオン紙として発信を続ける。経済と文化を両輪とし、陶芸などの催事にも紙面を割いている。文化、芸術が人気になれば経済を刺激し、経済が潤えば文化、芸術に貢献する、との好循環を意識する。

9. プランゲ文庫の活用

プランゲ文庫所蔵資料の活用例は、在野、地方で 3 例目だという。まずは大分県別府市に拠点を置く「大分プランゲ文庫の会」による活動。主宰者の白土（しらつち）康代著「占領下の新聞 別府からみた戦後ニッポン」（2015 年、弦書房発行）としてまとめられている。



さらに、経済誌「実業之富山」を発行していた実業之富山社の故大野一社長による研究がある。終戦翌年に同誌が創刊されていたことを再認識した大野社長は、富山県における検閲の実態を調べて同誌に連載。著書「占領期の地方雑誌—プランゲ文庫で辿る検閲の足跡」にまとめた。

近年編纂された都道県史や市町村史の現代編などでは、地域資料の空白を補うためプランゲ文庫の雑誌や新聞を取り上げる例が見られる。先進例としては「山口県史」が挙げられる。

白土康代さんらが活用したのは、山本武利一橋大・早稲田大名誉教授を中心とする「20世紀メディア研究所」が作成した「占領期雑誌記事情報データベース」。2005年に完成し、インターネット上で公開。著者名やタイトルでキーワード検索ができる。続いて新聞についても着手したが、あまりに膨大で費用がかかり過ぎるとして研究費が打ち切られ、中断している。

プランゲ文庫データベースの民間での利用が少ないのは、運営費などを賄うため有料としたのも一因では、と、山本名誉教授は話す。研究会の地方での開催や連携も考えたが、マンパワー的にハードルが高かったという。土屋教授によれば、プランゲ文庫の価値は、国立国会図書館にないものがほとんどだということ。そして中央より地方の資料が圧倒的に多いのに、もったいないという。都道府県ごとに分売されていたマイクロ資料を買った図書館も多いはずで、その後の活用の仕方に何か問題があるのでは、とする。

全国的にも、都道府県別、地域別などの調査研究の成果が少ない現状では、岐阜県内で発行された各紙誌のオールジャパン的位置付けが出来ない。「ぎふ人民しんぶん」や「大衆讀賣」は、進歩系の紙誌として代表的だが、東京圏や全国各地に同様の紙誌があったかどうか。あったなら、それらに比べてどうか、横のつながりはあったか、などを知りたいところだ。

“歴史探偵”を自認した評論家半藤一利は、著書「B 面昭和史」で、「日常生活のすぐそこにある『こぼれ話』を拾いだし、それらをつなげていくことで、かえって動きゆく時代というもののほんとうの姿がみえてくる」と書いている。都道府県史などに記録されてこなかった一般大衆の生活のこぼれ話を紡ぐには、新聞や雑誌こそ最良のテキストではないだろうか。

そして何より、戦時下の抑圧から解放されて声を上げた先人の思いや、急速に復興に向かう社会の動きを映し出す貴重な資料の多くを、眠らせたままにしておくことは残念でならない。プランゲ文庫のキュレータを務めるジェンキンス加奈さんも、「特に新聞の研究が進んでいないことを体感しています。キュレーターとしてできることを、細々とでも進めていこうと日々思っております」と述べている。

「復興期の新聞群像」では、思い付くいくつかのアプローチを試してみた。
今後、文庫所蔵資料が各地各方面で活用され、終戦直後の膨大な出版物に光が
当たることを願ってやまない。

了